

【特別講演1】 第8席

多紀元簡の業績

東京 小曾戸 洋

多紀元簡、字は廉夫、幼名は金松、長じて安清のち安長。桂山また櫟窓と号した。多紀元惠の長男として江戸に生まれた。

元簡は儒学を井上金峨に学び、医学を父より継承した。同時に当時躋寿館で医経を講義していた目黒道琢の影響を受けたことはいうまでもない。安永六年（1777）十二月、将軍家治にはじめて謁見。時の老中松平定信の信任を得、寛政二年（1790）十一月に奥医師に抜擢、法眼に叙せられた。翌同三年十月、父元惠の主宰する躋寿館が幕府直営の医学館となるに及び、その助教となり、幕府医官の子弟の教育にあたった。同六年六月、御匙見習。同十一年七月、父元惠の致仕に伴い家督を継ぎ、翌月には将軍の御匙となった。ところが享和元年（1801）医官の選抜の不正に憤慨して直言したため、十月奥医師を免ぜられて寄合医師に貶せられた。それにはかつて元簡を庇護していた松平定信がすでに老中職を去っていたという背景がある。同七年に再び奥医師に復されたが、この年十二月二日急逝した。享年五十六。

元簡は師の影もとに多くの文化人と交わり、清朝考証学の学風を医学に適用し、医学における考証学の基盤を固めた。著書はすこぶる多く枚挙にいとまないが、版行されんたものに『傷寒論輯義』『金匱要略輯義』『素問識』『靈枢識』『扁鵲倉公伝彙考』『脈学輯要』『医賸』『観聚方要補』、また未完に終わった歴大な類書『櫟窓類鈔』などがある。詩文・書画に秀で、その遺作も少なからず現存する。著述内容の素地は壮年期以前に形成されたものであるが、医学館の責任職や、幕府の重職に就いてからは多忙で著述の暇はなく、多くは寄合医師に遷された晩年にまとめられたものである。逆境がむしろ幸いして元簡を著述活動へと向かわせたのであった。その業績は後継者によってさらに展開・補完され、新たな成果を生み出していくこととなる。